

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 藤田 護	留学機関名 ボリビア外務省外交アカデミー
留学先国名 ボリビア	留学期間 西暦 2011年4月～2013年3月
研究テーマ 20世紀後半からの南米ボリビアにおけるアイマラ語ラジオドラマ—先住民言語による新しい表現の可能性と先住民族意識の高揚に果たした役割の研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>1. 研究テーマの説明</p> <p>アイマラ語は、南米でもケチュア語やグアラニー語に次いで話者数の多い先住民言語であるが、ボリビアにおいては、この先住民言語によるラジオ放送が1950年代以降発達してきたという顕著な特徴をもつ。本研究は、アイマラ語によるラジオ放送全体を視野に入れながらも、特にその中のラジオドラマと、それを担うアイマラ先住民出身のラジオ放送作家層が生まれて来る過程に焦点を当て、言語人類学と政治・社会人類学的側面から研究を行う。</p> <p>このようなラジオドラマの製作は、複数の側面からその重要性を指摘することができる。第一に、先住民が植民者言語としてのスペイン語ではなく自らの言葉で、かつ大規模な製作・発信を行うということの持つ新しさがある。かつては、先住民世界について、外部の人間が都市に住む支配階層に向けスペイン語で表現・発信することが支配的であったという状況に対して、新しい潮流の生成を意味する。第二に、このようなラジオドラマが、先住民ナショナリズム(アイマラ・ナショナリズム)の形成と密接な関わりを持つことが挙げられる。これは都市の専門能力を身につけた先住民層が、再度農村と自らの歴史につながりを持つこととした際に生まれてくる「われわれ意識」であり、その功罪をバランス良く検討することが、現代における重要な課題となろう。第三に、ボリビアにおいて歴史的に盛んな社会運動、特に先住民運動との関わりがある。ラジオドラマは、アイマラ先住民運動(カタリスタ運動)が展開する中で、その文化的・イデオロギ的側面を担ってきた一面があり、内容面と実際に関与したアイマラの人々の人脈を明らかにすることを目指す。</p> <p>2. 本研究の意義</p> <p>ボリビアにおいて、このようにラジオドラマを研究テーマとして体系的に取り上げた前例は、国内の研究者においても欧米のアンデス研究者の間でも存在せず、依然として未開拓の研究領域である。それでいて、アイマラ語のラジオ放送が盛んであることは、ボリビアのラパス地域では周知の事実であり、多くの人々が代表的なアイマラ語のラジオドラマの名前を挙げることができ、実際に聞いたことがある。従って、この研究テーマを手掛けることで、ボリビア社会に対して、広くは他のアンデス諸国社会に対しても、アイマラ語のラジオドラマが持っている重要性を再確認するという意味での社会貢献ができるであろう。</p> <p>また、学術的には、アンデスの言語人類学はこれまで口承の文学を中心に採録・研究が行われてきた経緯があり、口承と書記のあわいに属するような分野の研究は、ごくわずかしかない。また、ラテンアメリカ全体の社会人類学は、近年先住民出身の知識人層の誕生を重要な研究テーマとしているが、組合指導者層、知識人層に加え、ラジオ業界で専門的能力を積んだ層が存在することは、新しい視点であり、これまでの研究成果をより深化・重層化させる貢献ができるであろう。</p>	

# 成果報告書

記入日 2014年 4月 16日

氏名 藤田 護	留学先国名 ボリビア	所属機関 ボリビア・カトリカ大学
研究テーマ：南米ボリビアにおけるアイマラ語のラジオドラマの研究		
留学期間：2011年 5月 ～ 2013年 4月		
<p>私は2011年度及び2012年度の二年間にわたり本奨学金の給付を受け、ボリビアの首都ラ・パス市の近郊において、スペイン語と共に広く話される先住民言語であるアイマラ語に関して調査・研究を行った。当初この研究はアイマラ語のラジオ放送とラジオドラマから始まったが、それらの活動の基盤を成している口頭・口承のアイマラ語の歴史と文学の世界へと範囲を広げることができた。</p> <p>アイマラ語のラジオ放送とラジオドラマに関して、2011年度は、ラパス市に隣接するエルアルト市において、アイマラ語専門の放送局ラディオ・サン・ガブリエル（Radio San Gabriel）で、ラジオ放送に参加する機会を得つつ（番組への出演、ラジオドラマ・テレビドラマの収録への参加、撮影・収録補助）、同ラジオ放送が公開した資料を収集し、またボリビアにおける先住民ラジオ局に関する文献収集を行った。そして、同放送局で撮影され編集途中であったテレビドラマ <i>Katar Jawira</i>（『蛇の川』）について、そのアイマラ語で執筆された脚本にアクセスすることを得た。そして、アイマラ語の口承文学の世界で蛇は重要な位置付けをもつが、蛇が主人公となる口承文学で、同放送局によって番組として制作されたものの音源へアクセスする許可をもらった。また、このようなラジオ放送の発達は、スペイン語ではなく先住民言語で仕事をする専門職業層の形成・拡大がこれを後押ししているという認識の下で、同放送局に勤務する若手のアイマラ出身の放送作家・アナウンサーらに丁寧なインタビューを行い、生い立ちと街に出てきた経緯、アイマラ語で仕事をするようになった経緯、自らの仕事とアイマラ語に対する思いなどを語ってもらう機会を得た。</p> <p>これらの資料は、整理と分析を現在進めているところであるが、特にアイマラ語のラジオ放送が口頭・口承言語の世界と書き記された言語の世界双方の狭間に成立しているという観点から暫定的考察をまとめ、2011年8月末にボリビア国立民族学・民俗学博物館（Museo Nacional de Etnografía y Folklore）で開催された学会「民族学年次大会（Reunión Anual de Etnología）」において発表を行い、翌2012年にこの論考は刊行された。</p> <p>上記アイマラ語放送局で放送されたラジオドラマで1980年代に人気を集めた作品に、20世紀前半の先住民指導者サントス・マルカ・トーラ（Santos Marka T'ula）を扱ったものがあるが、このラジオドラマを制作したアンデス・オーラルヒストリー工房（Taller de Historia Oral Andina, THOA）との関係が深まる中で、その原資料としての20世紀前半のカシーケス・アポデラードスの運動におけるアイマラ語のオーラルヒストリー資料が途中まで整理が進んだまま未刊行で残されていることに気付いた。こ</p>		

これは当時の運動の指導者のうち三名について、その子孫や同時代に書記として活動に同伴して1980年代に存命であった者らに詳細なインタビュー調査をしたものであり、アイマラ語の資料としても歴史資料としても極めて貴重なものであることが分った。整理された部分は、全12章構成でまとめられ、74,596語あり、15名への調査から成っている。このオーラルヒストリー資料について、2011年度中にTHOAのアイマラ語ネイティブのFilomena Nina Huaracachoとの共同作業で、全てをスペイン語へ翻訳した。2012年度には、元の音声テープが失われていたのを、ボリビア国立民族学・民俗学博物館(MUSEF)にコピーが存在しているのを見つけ出し、交渉の結果として回復することができ、これらのテープを全てデジタル化し保存した。この元の音声と聞き起こした結果のアイマラ語オーラルヒストリー資料との対応付け、及び聞き起こしを行った手稿の整理が依然課題として残ることとなった。また、その後上述の調査作業にも1980年代に携っていたEsteban Ticona Alejoによる、同運動の別の先住民指導者フランシスコ・タンカラ(Francisco Tanqara)の孫であるフリアン・タンカラ(Julian Tanqara)へのインタビュー記録がテープ10巻分存在していることが分り、同テープの内容の確認作業を行った。この整理と刊行も依然課題として残されている。

これらの作業についての暫定的考察を、“Retomando la historia oral de Santos Marka T’ula y los caciques apoderados”「サントス・マルカ・トーラとカシーケス・アポデラードスのオーラルヒストリー再考」と題した論考にまとめ、2011年度のTHOAの創立記念日のシンポジウムで発表する機会を得た。同論考及び上記オーラルヒストリー草稿の一部のアイマラ語原文とスペイン語対訳を含め、他のオーラルヒストリーに関する論考も収録した*Historia oral*を2012年8月にラパス市で刊行し、私が共同編集者として制作に携わった。

また、これらのアイマラ語の口頭・口承世界への関心から、私が話を聞く機会を得たラパス市近郊の溪谷部のお年寄り3名との間で口承文学とオーラルヒストリーの聞き取り調査を進め、一部未整理のものが残っているが25の話を録音した(再話されたものを含めると数は増大する)。それらのほとんどはアイマラ語で語られたものであり、一部スペイン語で語られたものがある。これらは、研究・調査がまだそれほど進んでいないアイマラ語の口承文学のレパートリーの一端を明らかにするものとして、非常に貴重なものであり、アイマラ言語文化研究所のJuan de Dios Yapitaと上述のFilomena Nina Huaracachoの協力を得て、音声の聞き起こしとスペイン語対訳を進めることができた。この作業は、留学期間終了後も継続中である。

これらの私が採録した口承文学は、話者が暮らす具体的な場所の文脈の中で展開していくものであり、またオーラルヒストリーにあたるものと口承「文学」にあたるものの境界がそれほど明確ではなく、むしろ口承文学が現実にせり出していき、現実の人物や出来事を口承文学で説明しようとする。この興味深いアイマラ語の口承文学のあり方について、“La apertura de los cuentos aymaras a la realidad”「アイマラ語の民話の現実への開け」という論考をまとめ、2012年の民族学年次大会で発表した。採録した話全ての聞き起こしとスペイン語対訳の作業を現在進めるとともに、日本及びボリビア双方での原文テキストの公刊に向けて調整を行っている。アイマラ語の口承文学について公刊されている原文テキストはまだまだ限られており、重要な貢献となると考えている。

また、これらの作業を進めていく中で、2012年度において先方からの要請に応じる形で、ボリビア国立民族学・民俗学博物館(MUSEF)において、学部上級から大学院生を対象としたオーラルヒストリーと口承文学のセミナー授業を実施することになり、国立サンアンドレス大学の Cleverth Cárdenas、ボン大学(ドイツ)の Anne Eberth 及び THOA 代表の Lucila Criales とともに、講義・セミナーを行い、また受講者の現地調査と報告書・論文執筆のチュートリアルを行った。このような形で、学生と関わる機会を得て、共に考えていく場をもてたことは、調査を進めていく上でのまたとない後押しとなった。

THOA においては、アイマラ出身の若い知識人たちと共に、先住民からの開発概念の捉え直しとして「よき生活」(アイマラ語では *suma qamaña* とする)とは何かについての考察が進んでおり、2012年度には毎週勉強会を開いてこの検討を進め、わたしはこの検討会に出席する機会を得た。そこではアンデスの口承文学の一ジャンルであるエウハ(*iwxá*、「言い伝え」「格言」)に着目しながら、両親や祖父母から受け継がれている教えの中に示されている生き方を、スペイン語ではなくアイマラ語から考えていこうとする試みが進められ、またアイマラ語で「生きる、生活する」を意味する複数の単語(*qamaña*, *jakaña*, *sarnaqaña*, *utjaña*)がどのように使い分けられるかについての考察を進めることとなった。これは先住民言語を通じて「人間」あるいは「生活」を概念化していく過程であり、この作業を共有できたことは私にとっても大きな勉強となった。この成果については、現在論文を執筆中であり、成果を発表したいと考えている。

より大きく、ボリビア、そしてアンデス/ラテンアメリカにおける多元性をどのように捉えるか(社会の多元性、文化の多元性、文学の多元性)は重要なテーマであり、ボリビアで早くから多元性に着目して政治思想・社会思想を展開し、文化面にも大きな影響を与えてきたレネ・サバレータ・メルカード(René Zavaleta Mercado)という思想家がおり、この思想の現在まで残る影響力を検討していく作業を進めた。この成果は2012年度にエクアドルのキトで開催されたラテンアメリカ政治学会で発表し、同じ年にボリビアのラパス市で同世代の研究者5人で日本人の研究成果をボリビアでスペイン語で発表するというセミナーの場においても発表することができた。特に後者のセミナーは、日本人の研究者による研究の現地への還元という意味でも重要な試みであったという評価を得た。

以上の調査とその成果に加えて、再度の長期のボリビア滞在を十分に楽しむことができた。以前からともに踊っていたグループとともにカルナバルで踊り、またより小さい村の祭りでモレナダ(踊りの一つ)を踊る機会が二度あった。調査で仲良くなった幾つかの家族とはカトリックの疑似親族関係の中で子どもの親代わりになったりしているため、週末に皆で料理をして一緒に食べるなど、複数の家族と時間を共にしていく中で調査を進められたことは大きな喜びであった。特に長期の滞在中で、アイマラ語が話される空間で十分に時間を過ごせたことは、語学力の観点からも大きな糧となった。

これらの調査を整理し現地で刊行する作業はまだ継続しているが、これらは全てボリビアという範囲を越えた先駆的取り組みを構成すると評価されており、このような調査が可能になったのは本奨学金のおかげである。授業に出席することではなく調査に専念できる奨学金が存在していることで、現地調査においてなすうる貢献の程度が大きく増えるため、このことも含め、貴財団に深く感謝の意を表したい。

以下、調査の合間に撮影された写真を三点添付する。



上の写真は、口承文学の調査の途中、語り手のお年寄りたちとその家族と。



上の写真は、アイマラ語専門ラジオ放送局 Radio San Gabriel の番組担当者たちと独立記念パレードで。



上の写真は、高原部の村でリャマの予防接種を手伝っている途中。